

サレルノ医学校——その歴史と ヨーロッパの医学教育における意義

坂井 建雄

順天堂大学大学院医学研究科 解剖学・生体構造科学

受付：平成27年6月1日／受理：平成27年10月9日

要旨：サレルノ医学校は10世紀後半に弟子を育てる医師の緩やかな共同体として成立した。13世紀中葉までの時期は3期に分けられる。早期（11世紀末まで）には古代の医学文書をもとに医学実地書が編まれ、アラビア語の医学文献がラテン語に訳され、医学教材集『アルティセラ』が編まれた。盛期（12世紀末まで）には、『アルティセラ』文書に注釈が加えられ、薬剤書や医学実地書が新たに多数書かれた。晩期（13世紀中葉まで）にはサレルノで学んだ医師がヨーロッパ各地で活躍した。13世紀中葉以後にサレルノ医学校の学校組織が形成され、16世紀末に大学になり、1811年に廃止された。サレルノ医学校は医学の理論的教育の先鞭をつけ、医学実地書の基本型を編み出して18世紀末まで受け継がれた。

キーワード：医学教育，医学理論，医学実地，サレルノ養生訓，アルティセラ

サレルノは南イタリアでナポリから南東に50キロほどのところに位置する人口13万人ほどの小都市で、ティレニア海につながるサレルノ湾に面している。第二次大戦末に連合軍のアヴェランチ作戦の戦場となり市街は大きな被害を受けた。かつてここにはサレルノ医学校 Schola Medica Salernitana があり、10～13世紀に発展して多くの医師を育て、その名声はヨーロッパ中に広まった。サレルノの医師たちによって書かれた医学文書は手稿としてヨーロッパ各国の図書館に残され、15世紀末以降には印刷・出版されるようになった。『サレルノ養生訓 Regimen Sanitatis Salernitanum』は、健康を保つための食事や生活習慣について書かれた韻文を集めたもので、世界中に広まり現在でもよく読まれている。しかし医学史の成書においてサレルノ医学校は、暗黒の中世における一つのエピソードとして扱われ、これまで西洋医学の歴史の本流に位置づけられることはほとんどなかった（図1）。

サレルノ医学校についてはドイツのズートホフ

らが20世紀初頭に精力的に研究をして多くの成果を上げてきた¹⁾。またイタリアの医学史家と医師たちは、サレルノ医学校について独自の視点から研究を続けており、最近の医学系の雑誌にも論考を発表している²⁾。しかしサレルノ医学校の実体については憶説と矛盾に満ちた言説が広まっており、根拠のある確実なことは何かを見極める必要がある。本稿では、サレルノ医学校についてこれまでに積み重ねられた研究と現存する文献資料を調査して、歴史上のサレルノ医学校がいつ頃生まれたか、どのような性格の学校であったかを明らかにするとともに、ヨーロッパの医学教育の歴史においてサレルノ医学校が果たした役割について考察する。

サレルノ医学校の起源

サレルノ医学校の起源は、謎に包まれており、誰が設立したのか定かではない。17世紀にイタリアの歴史家マッツァはサレルノの都市の歴史と伝承を収集して、サレルノ医学校の設立者として

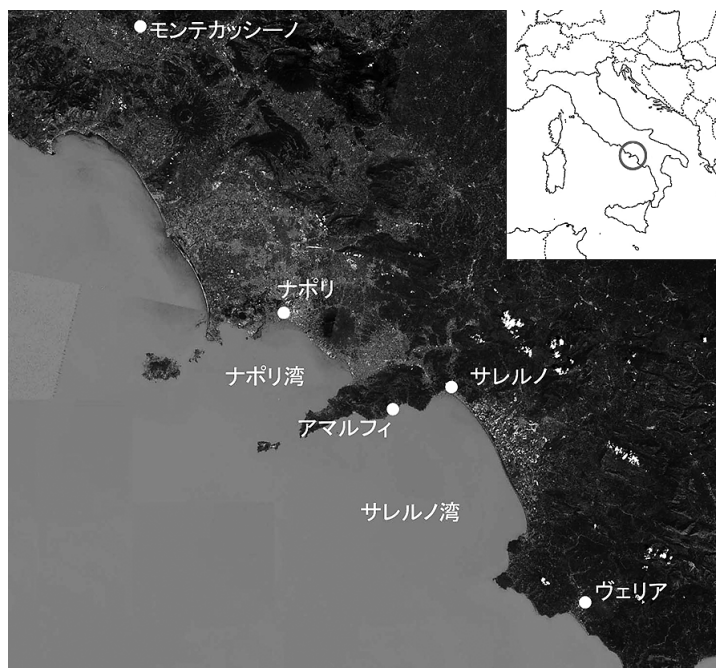


図1 サレルノとその周辺

出身の異なる4人の医師の名を見出し、それぞれの言語で医学が教えられたという³⁾。その後の医学史家たちからは医学校の創設者としてさまざまな説が出され、アレキサンドリアからの避難者や、ベネディクト会のモンテカッシーノの修道士や、シチリアを征服したアラビア人などの説がある⁴⁾。フランスの医学史家ダランベールはそれらの説を否定して、医学校が時代と地域の環境の中で段階的に成長し成立したとの見解を示した⁵⁾。サレルノには古代ギリシャの植民都市があり、ローマ時代には保養地として知られていた。9世紀にはアラビア人がシチリアと南イタリアの一部を征服し、またユダヤ人も数多く移住して、サレルノを含む南イタリアには国際的な文化の交流があった。サレルノ医学校はそのような異文化の交錯の中から生み出されたのであり、出身の異なる4人の医師が医学校を設立したという伝承はサレルノ医学校が誕生した背景を象徴的に示したものと考えられる⁶⁾。

サレルノ医学校の設立時期についてもさまざまな説がある。古代ローマに遡るとする説⁷⁾、640年のアラビア人によるアレキサンドリア壊滅から

逃避した人々が設立したとする説⁸⁾、802年にシャルルマーニュが医学校を大学に変えたとする説⁹⁾があるが、いずれも根拠となる資料がなく認めがたい。サレルノ医学校に関わる同時代の資料は、デ・レンツィにより収集され、その後のサレルノ医学校の研究に大きく寄与している¹⁰⁾。ズートホフは10世紀末に書かれた記録の中に、フランス王とサレルノ出身の医師に関わる記事を見出し、その王がシャルル3世(在位893–922)であると考へ、サレルノ医学校が9世紀末には存在したと推測した¹¹⁾。しかしクリステラーはそれらの記録を精査して、サレルノ医学校に関する最初の確実な言及が985年のヴェルダンによる年代記に見出され、それ以後にしばしば記録に現れることから、サレルノの医学校が10世紀の後半に始まったと結論づけている¹²⁾。いずれにしても初期のサレルノ医学校については直接の資料がなく、伝存する資料から推測するしかない。

古代ギリシャの哲学者パルメニデス Parmenides が紀元前5世紀にサレルノ南方のエレア Elea (現在のヴェリア Velia) に設立した医学校が、サレルノ医学校に引き継がれたという仮説をイタリア

の医師たちが紹介している¹³⁾。この仮説はイタリアの歴史家エブネルが1960年代に発表したもので、ヴェリアでの考古学調査を元に、ここでパルメニデスが学校を設立し“Oulis”の名を持つ多数の医師が活躍し、2世紀の洪水で建物が破壊されて再建され、その後に医学校がサレルノに移ったと推測した。しかしナットンによる詳しい検証によりこの仮説は否定され、仮説を支持する証拠もその後得られていない¹⁴⁾。

サレルノ医学校の歴史

サレルノ医学校はおおよそ10世紀後半に生まれたと考えられる。その後も長らく医学校の存在を示す直接の文書記録はなく、その活動は医師たちの残した医学文書を元に論じられている。組織化された教師組合 collegium や教師と学生の共同体 corporation があったという直接の証拠はないが、活発に医学教育が行われ医学教師の共同体が存在したことが間接的に示されている。この組織化以前の時代をズートホフは、早期、盛期、晩期の3期に分けている¹⁵⁾。13世紀中頃以後のサレルノ医学校は次第に行政に取り込まれて組織的なものになり、文書記録が豊富に残されるようになった。その一方でヨーロッパ各地に設立された大学の影に隠れて、サレルノ医学校の活動は目立たなくなっていた。

1) 早期サレルノ (10世紀後半～11世紀末)

サレルノには個人的に徒弟を教える医師たちがいて、医学教師の緩やかな共同体が生まれたと考えられる。古代の著作が伝存しており、そこから教育のために必要な内容が選別され、著作としてまとめられた。この時期に数多くの医師が活躍したはずだが、その多くの名前は不明である。数人の医師が著作を通して名前が知られている。ガリオポントゥス Gariopontus (fl. c. 1035–1050) は『受難録 Passionarius』を著しており、同時代の資料の中で学識ある医師との言及がある¹⁶⁾。この著作は、古代の文書を元に局所的な疾患を頭から足への順に列挙し、全身性の熱病を加えてその治療を扱ったもので、その後の医学実地書の嚆矢とされ

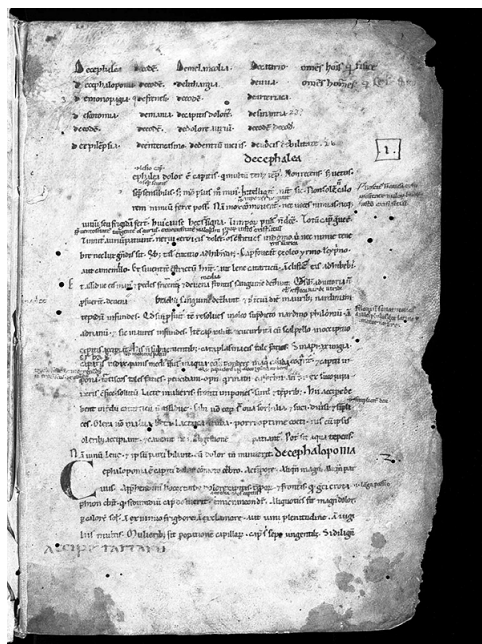


図2 ガリオポントゥス『受難録』、12世紀初頭の手稿 (スイス、コロニー、ポドマー財団蔵)

る¹⁷⁾ (図2)。

ペトロケルス Petrocillus Salernitanus (fl. c. 1035–1050) の『実地 Practica』もよく読まれた。アルファヌス1世 Alfanus I (c. 1015–1085) はサレルノで医学を学び、モンテカッシーノの修道士を経て1058年にサレルノの大司教になった¹⁸⁾。古代の著作をラテン語に翻訳し、4世紀のネメシオス Nemesios による『人間の性質について De natura hominis』を訳している。またアラビア語文献の翻訳を奨励してコンスタンティヌス・アフリカヌス Constantinus Africanus (?–1098/9) をモンテカッシーノに呼んだ。コンスタンティヌスはアラビア語から多数の著作をラテン語に訳した。その中には古代のギリシャ語の著作やアラビア語で新たに編まれた著作が含まれ、失われていた古代の医学文書の内容をサレルノを通してヨーロッパに伝えた¹⁹⁾。コンスタンティヌスの著した『全医術 Pantegni』は、ハリー・アッバス Haly Abbas による医学百科全書のおもに理論的な部分を訳したもので広く読まれた。またコンスタンティヌスが訳した文書のうちヨハニティウスの『入門 Isagoge』、ヒポクラテスの『箴言 Aphorismen』と

『予後 Prognostikon』は、医学教育のための文書集『アルティセラ Articella』の中核に組み込まれた。

2) 盛期サレルノ(11世紀末~12世紀末)

コンスタンティヌスの訳業によって古代およびアラビアの多くの著作がラテン語に訳され、サレルノではこれらを利用して注釈 commentary を加えたり、概説 compendium を作ったりする同化の時代が始まった。

この時期には医学教材集『アルティセラ』の文書に注釈がつけられるようになった。バルトロメウス Bartholomaeus (fl. c. 1150–1180), マウルス Maurus (c. 1130–1214), ムサンディヌス Musandinus, Petrus (fl. late 12th century) はこの時期の代表的な教師で、多数の注釈を残している²⁰⁾。これらの注釈は、医学校での授業のテキストとして用いられ、さらに授業で行われた討論を反映してさらに注釈の充実が図られたと思われる。

古代から伝承した多数の薬剤を取めた薬剤書が編まれた。ニコラウス Nicolaus Salernitanus; (fl. c. 1150) の『ニコラウスの解毒薬 (Antidotarium nicolai)』はとくに有名である²¹⁾。マテウス・プラテアリウス Platearius, Matthaues (?–1161) が著者として想定されている『単純医薬書 (Liber de simplici medicina)』は、書き出しの語句から“Circa instans”と呼ばれ広く普及した(図3)。

個別の疾患を扱う医学実地書も次々と著された。アラビア出身でコンスタンティヌスの弟子のヨハネス・アフラキウス Johannes Afflacijs (c. 1040–1100) は『急性病の治療論文 De aegridudinum curatione tractatus』を著した。アルキマタエウス Archimatthaeus (12th century) は45の疾患とその治療法を取めた『アルキマタエウス実地 Practica Archimathaei』を著した。上述のバルトロメウスには『サレルノ, バルトロメウス先生実地 Practica magistri Bartholomaei Salernitani』がある。伝説の女医トロータの夫と目されるヨハネス・プラテアリウス父 Platearius, Joannes I (?–?) とその息子のヨハネス・プラテアリウス子 Platearius, Joannes II (fl. 1120–1150) は、『実地要綱 Practica brevis』の著者と考えられている。トロータ Trota (fl. 2nd quarter



図3 プラテアリウス『単純医薬書』1280-1310年頃の手稿(イギリス, ロンドン, 大英図書館蔵)

of 12th century) の『トロータによる実地 Practica secundum Trotam』も一部が伝存している。コフォ Copho (fl. first third of 12th century) による『コフォの実地 Practica Cophonis』は2書からなり、第1書は熱病(61章)、第2書は頭から足へ個別の病氣(85章)を扱う²²⁾。

サレルノでは12世紀初頭から動物の解剖が何度か行われていたことが、残されている文書から明らかにされている。『ブタの解剖学 Anatomia porci』はその第1回のもので、誤ってコフォの著作とされていた。第4回の解剖の文書は14世紀初頭のものである²³⁾。

ロゲリウス Rogerius Frugardi (before 1140–c. 1195) は外科を専門にしてサレルノで教師を務めたが、1170年代にバルマに招かれてそこで医学を教えた。『外科学 cyrurgia』を著している²⁴⁾(図4)。

サレルノ医学校で編まれた医学著作は、ヨーロッパとアメリカの図書館に手稿として数多く残されており、一部は15世紀末以後に印刷・出版



図4 ロゲリウス『外科学』14世紀初頭の手稿から外科処置の細密画（イギリス，ロンドン，大英図書館蔵）

されている。とくに1837年にブレスラウのマグダレン高校図書館で発見された「ブレスラウ手稿 Breslau Codex」は、盛期サレルノで編まれた医学文書のほとんどを含み、その当初の姿を知ることができるきわめて価値の高い手稿である。1170年頃に成立したと考えられる²⁵⁾。

3) 晩期サレルノ（12世紀末～13世紀中葉）

この時期にサレルノでは独自性の高い著作が著されるようになる。サレルノで学びヨーロッパ各地で活躍する医師たちが多く現れ、サレルノ医学校の名声は高まる。

ウルソ Urso of Salerno (?-1225) はサレルノの最後の偉大な教師であり、アリストテレス自然哲学を応用して、理論的な著作を著した²⁶⁾。ヨハネス・デ・サンクト・パウロ Johannes de Sancto Paulo (fl. 12-early 13th century) はサレルノ大司教の下で学び、サレルノで教えて4つの著作を残している²⁷⁾。ジル・ドゥ・コルヴェイユ Gilles de Corbeil (c. 1140-c. 1224) はサレルノでムサンディヌスの元で学び、サレルノで教えたが、パリに移りフィリップ2世の侍医になる。医学に関する韻文の著

作を多数著し、パリにサレルノの医学を広めた²⁸⁾。ブルーノ・ダ・ロンゴブルゴ Bruno Da Longoburgo (c. 1200-c. 1286) はサレルノで学び、パドヴァ大学で最初に解剖学を教授した²⁹⁾。

サレルノは医学の先進地として名声を高め、医学に関する文書や規則にしばしばサレルノの名前がつけられたが、サレルノとの結びつきが不明確なものも少なくない。『サレルノ養生訓 Regimen sanitatis salernitana』は13世紀後半以後に成立した、養生法について述べた韻文集で、最初期のものは364編の詩で6つの非自然的な事物（空気、飲食物、運動と休養、睡眠と覚醒、充満と排出、感情）を扱う。その後の版では次第に詩の数が増えていき19世紀に編纂されたものでは3520編に膨れあがっている。サレルノの名前を冠してはいるが、サレルノで編まれたものかどうかは明らかでない。世界各国語に訳されている³⁰⁾（図5）。『サレルノ問題集 Quaestiones salernitanae』はラテン語で書かれた自然哲学についての問答集で、問答の数は30編から332編まで版によって異なる。1200年頃にイギリスの学者の手で作られたと考えられている。問答の中心的な部分は、明らかに

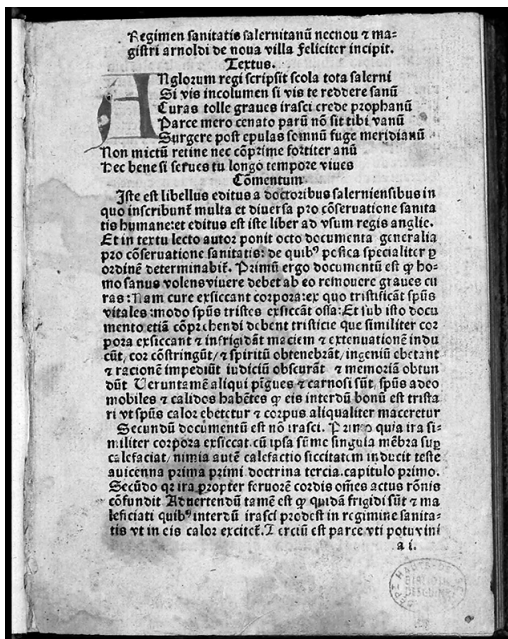


図5 『サレルノ養生訓』1480年、パリ刊（フランス、オー＝ド＝セヌーズ県、アンドレ・デズギューズ図書館蔵）



図6 『アルティセラ』1487年、ヴェネツィア刊（ドイツ、ミュンヘン、バイエルン州立図書館蔵）

サレルノ医学の影響を受けており、またサレルノについての言及があり、ウルソないしまウルの影響を受けた人物が作成に関わっていたと思われる³¹⁾。

医学教材集『アルティセラ Articella』は、サレルノでの医学教育に用いられただけでない。12世紀末から13世紀にかけてパリ、モンペリエを始めヨーロッパ各地の大学に広まり、『アルス・メディシン Ars medicine』とも呼ばれた。ウィーン、エアフルト、チュービンゲンなどドイツ語圏の大学でも用いられた。さらにいくつかの文書を付け加えて拡張された版も現れ、15世紀末から18の版が印刷出版され、16世紀まで医学教育に用いられ続けた³²⁾ (図6)。

13世紀初頭まで、サレルノ医学校の組織や制度についての同時代の資料はない。特許状や学則でこの時期に遡るものはなく、博士の学位を授与したとの記録も現存する学位記もない。都市や王や教会などの権威者がサレルノ医学校を認知した証拠もない。教師は生徒と個人的な関係を結んで授業を行い、教師の間で協力関係があったが、初

期の大学に相当する教師組合 collegium までは組織されていなかったと思われる。ジル・ドゥ・コルヴェイユは詩の形で4編の医学著作を残しており、そこに含まれる自伝的な記述で、学生は学習を積んである段階に達すると先生 magister になったと思われる。サレルノ医学校の教師たちは magister と呼ばれるが、女医のトロータにはこの称号は用いられていない³³⁾。

4) 組織化の段階 (13世紀中葉～19世紀初頭)

12世紀にヨーロッパ各地に大学が現れ、ボローニャの法学、パリの神学、モンペリエの医学などが発展し、13世紀初頭には正式かつ恒常的な組織になった³⁴⁾。サレルノ医学校は13世紀には最盛期を過ぎたが、この頃から学校組織が次第に決まった形をとるようになっていった。

神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世 Friedrich II (在位 1220-1250) は、1231年に「メルフィ憲章 Constitutiones Melphitanae」を公布した³⁵⁾。その第

3章45条で、医師候補者はサレルノで学校の教師の前で公開試験を受け、それから王またはその代理から免許を受けると定められた。これによりサレルノ医学校は国の学校と認められ、国に従属するものとなった。

フリードリヒ2世の没後、王位を継いだコンラッド2世は、ナポリ大学とサレルノ医学校を統合しようと試みたが、後を継いだマンフレッド王は旧に復してナポリ大学とサレルノ医学校を並立させた。1266年にシチリア王となったアンジュー家のカルロ1世は、1269年にサレルノに住む学生の税を免除した。1277年にはフレデリク2世の命令を復活し、王の許可なく学位を与えることを禁止し、それを学生集会で公布した。1280年には租税免除を教授に与え、同時に正規の学則を公布した。14世紀初頭に始めて、教授の俸給が公的な記録の中で言及され、1307年には国から支払うこと、1338年にはサレルノ市から国税によって支払われることが述べられている。かつては個人的な授業を基礎にして学生が教授の給料を支払っていたが、その伝統的なやり方は、次第になくなった。1359年にナポリ女王ジョヴァンナ1世は、医師の免許についてのフリードリヒ2世の命令を廃止し、医学校の出す証明書が医師の免許として有効になった。1442年にアラゴンのアルフォンソ王は、都市の要請によって教授組合 collegium の設立を許可し、これによりサレルノ医学校はようやく博士の学位を与える権利を得た³⁶⁾。

16世紀にサレルノでは学芸、医学、法律の教授陣を充実させ、大学水準の教育が行われた。1592年の最初の大学名簿では、法学4名、医学2名、論理学2名、自然哲学1名が置かれ、この頃にサレルノ大学が発足したと考えられる。1811年11月29日、ナポレオンの占領下にサレルノ大学は廃止された³⁷⁾。

サレルノ医学校・大学は、13世紀中葉以後も数多くの医師を育てた。この時期にサレルノで医学を教えたあるいは学んだ著名な人たちを挙げておく。

ニコロ・ダ・レッギオ Niccolò da Reggio (fl. first half of 14 century) はカラブリアで生まれ、アン

ジュー家のナポリ王の宮廷で古代のギリシャ語文献の翻訳に従事した。医学をどこで学んだかは不明だが、サレルノ医学校で教えたという説がある。ガレノスの著作を中心に約60編を翻訳し、ガレノスの『ヒポクラテスの「箴言」注解』、『身体諸部分の用途』などが著名で後世までよく用いられた³⁸⁾。

ジョヴァンニ・ダ・プロシダ Giovanni da Procida (1210–1298) はサレルノで生まれ、医学校で学んで教師となった。フリードリヒ2世の侍医となってその最期を看取り、息子たちの教育にも当たった³⁹⁾。

シルヴァティクス Silvaticus, Matthaeus (1280–1342) は学識の高い医師・教師で、サレルノ医学校で学び教えた。ナポリ王ロベルトの侍医を務め、『医学百科事典 Opus pandectarum medicinae』を著した。この本はきわめて人気が高く、15世紀末以後にも繰り返し印刷・出版された⁴⁰⁾。

コトゥーニョ Cotugno, Domenico Felice Antonio (1736–1822) はサレルノ医学校を卒業したが教職に就くことができず、臨床の傍ら研究を続けた。脊髄を包む脳脊髄液を発見し、脳室とつながることを示唆し、60年後にマジャンディにより再発見された。内耳の前庭水管、鼻口蓋神経などを発見した⁴¹⁾。

医学史におけるサレルノ医学校の役割

サレルノ医学校は10世紀後半から13世紀初頭にかけて、明確な組織体は作らずに緩やかな教師の共同体として存在し、優れた臨床家を育てて医学校としての名声を高めた。またこの間に多数の医学著作を生みだし、広くヨーロッパ各地に伝えられた。その後の医学にとくに大きな影響を与えたのは、医学の理論的教材として用いられた文書集『アルティセラ Articella』と、個別の疾患を扱う「医学実地 practica」の著作である。

中世以後のヨーロッパの大学医学部においては、理論 theoretica と実地 practica が重要な授業科目であった。医学理論では自然と人間に関する普遍的な原理を明らかにし議論し、医学実地では健康を保持し回復するための手段を教えた。北イタ

リアの大学では早い時期から医学理論と医学実地が分離しており、ポローニャ大学では1320年代に、パドヴァ大学では14世紀末に2つの教授職が分かれていた。医学教授はもともと実地と理論の両方を担当したが、実地を担当する教授に「実地」という呼称がまず用いられ、「理論」の呼称が遅れて用いられるようになった⁴²⁾。北イタリア以外、とくにドイツの大学では医学理論と医学実地を兼務する例が多くみられた⁴³⁾。

1) 医学の理論的教材

『アルティセラ』はもともとサレルノ医学校で編まれた教材集で、ヨーロッパの医学教育によく用いられた。12世紀末から13世紀にかけてパリ、モンペリエを始めヨーロッパ各地の大学に広まり、後にはウィーン、エアフルト、チュービンゲンなどドイツ語圏の大学でも用いられた。『アルティセラ』の中核となるのは、アラビアのヨハニティウスの『入門』、ビザンツのフィラルトゥスの『脈について』とテオフィロス・プロトスパタリオスの『尿について』、ヒポクラテスの『箴言』、『予後』、『急性病の治療』、ガレノスの『医術』の7編で、サレルノの医師たちやパリなどの医師たちによって注釈が加えられ、さらにヒポクラテスの他の著作やアヴィケンナの『医学典範』の一部が加えられて豊富になっていった。『アルティセラ』は1476年以後1534年までの間にパドヴァ、ヴェネチア、リヨンなどで18版が出版されたことが確認される⁴⁴⁾(表1)。

ヨーロッパでは『アルティセラ』よりもやや遅れて、アラビアのアヴィケンナの『医学典範 Canon』のラテン語訳が医学の理論的教材として用いられるようになった。12世紀のゲラルドゥス Gerardus Cremonensis (c. 1114–1187) もしくは13世紀の同名の人物が訳したとされている。ポローニャ大学では13世紀末までに『医学典範』がカリキュラムに加えられ、北イタリアの大学でとくによく用いられた。ヨーロッパ各地にも広まり、17世紀まである程度使われ続けた。『医学典範』のラテン語訳は1473年以後1658年までの間にパドヴァ、ヴェネチア、リヨンなどで26版が

表1 『アルティセラ』の出版状況(著者の調査による)

パドヴァ	: 1476
ヴェネチア	: 1483, 1487, 1491, 1493, 1500, 1502, 1507, 1513, 1523
リヨン	: 1505, 1515, 1519, 1525, 1527, 1534
パヴィア	: 1506, 1510

表2 『医学典範』の出版状況(著者の調査による)

ストラスブール	: 1473
ミラノ	: 1473
パドヴァ	: 1476, 1479
ヴェネチア	: 1483, 1486, 1490, 1495, 1500, 1505, 1507, 1522, 1527, 1544, 1555, 1562, 1564, 1580, 1582, 1595, 1608
リヨン	: 1498, 1522
パヴィア	: 1512
バーゼル	: 1556
ルーヴァン	: 1658

出版されたことが確認される⁴⁵⁾(表2)。

16世紀中頃に医学の理論的教材の新しいタイプが登場した。フランスのフェルネル Fernel, Jean (1497–1558) が著した『医学 Medicina』(1554)である。この書物は3部からなり、第1部は生理学、第2部は病理学、第3部は治療論である。その後、同様の医学理論書が次々と出版され、徴候論と健康論が加わって5部構成になり、その多くは『医学教程 Institutiones medicae』という表題を有していた。医学理論書の内容は『医学典範』の第1巻ときわめて類似しているが、アラビア医学に拠らずに、ガレノスなど古代の原典を参照して書かれている。医学理論書は16世紀中葉から18世紀前半まで、ヨーロッパ各国の多くの著者によって書かれた。フランスでは2大学、ドイツでは11大学、さらにオランダ、イタリア、チェコ、オーストリア、スイスの大学の医師による医学理論書が確認できる。ヨーロッパ全域では少なくとも18大学の23人の医師が医学理論書を出版している⁴⁶⁾(表3)。

『アルティセラ』、アヴィケンナの『医学典範』、フェルネルの『医学』などの医学理論書は、医学実地の著作と並行して用いられ、医学教育の理論的な部分を扱う教材である。その嚆矢にあたる

表3 おもな医学理論書とその著者（著者の調査による）

[フランス]
・パリ大学
フェルネル (1497-1558) 『医学』 (1554)
リオラン (1539-1606) 『普遍医学提要』 (1598)
・モンペリエ大学
リヴィエール (1589-1655) 『医学教程』 (1655)
[ドイツ]
・チュービンゲン大学
フックス (1501-1566) 『医学教程』 (1555)
・ランズベルク大学
マイヤー (fl. 1602-1603) 『医学教程初歩』 (1603)
・ヴィッテンベルク大学
ゼンネルト (1572-1637) 『医学教程5巻』 (1611)
・イェナ大学
メビウス (1611-1664) 『医学教程要約梗概』 (1662)
・アルトドルフ大学
ブルーノ (1629-1709) 『一般医学教義』 (1670)
・ライプツィヒ大学
エトミュラー (1644-1683) 『医学理論と実地一般指導』 (1685)
・マールブルク大学
ヴァルトシュミット (1644-1689) 『理性的医学教程』 (1688)
・ギーセン大学
ヴァレンティニ (1657-1729) 『医療指針』 (1691)
・フランクフルト
ユンケン (1648-1726) 『折衷的近代医学基礎』 (1693)
・ハレ大学
ホフマン (1660-1742) 『医学の基礎』 (1695)
シュタール (1660-1734) 『真正医学理論』 (1708)
・コンスタンツ大学
ヴィカリウス (1644-1716) 『普遍医学基礎』 (1698)
[オランダ]
・ライデン大学
ヘウルニウス (1543-1601) 『医学教程』 (1601)
ヤッカエウス (1585-1628) 『医学教程』 (1624)
デューシング (1612-1666) 『普遍医学要約』 (1649)
ブルーフエ (1668-1738) 『医学教程』 (1708)
[イタリア]
・ナポリ大学
トッツィ (1638-1717) 『医学第1部理論』 (1681)
[チェコ]
・ブラハ大学
ツァイドラー (1616-1686) 『医学教程5書』 (1692)
[オーストリア]
・インスブルック大学
フィッシャー (1676-ca. 1740) 『理性的医学王道』 (1717)
[スイス]
・バーゼル大学
ツヴィンガー (1658-1724) 『普遍医学提要』 (1724)

『アルティセラ』はサレルノ医学校で生み出された。印刷・刊行された版数でみると、『アルティセラ』は1476年から1534年まで少なくとも18の版が出されている。『医学典範』は1473年から

1658年まで少なくとも26の版が出され、これ以外にも抜粋や注釈を加えた版が数多くある。医学理論書は、1554年のフェルネルの『医学』から始まり、18世紀初頭のツヴィンガーの『普遍医学提要』(1724)の頃まで少なくとも23人の著者が出版した。医学の理論的教材としての『アルティセラ』は、後から出てきた『医学典範』に置き換えられ、これはさらに医学理論書に置き換えられていった。サレルノ医学校で生まれた『アルティセラ』はヨーロッパにおける医学教育の2本の柱のうち医学理論の教育の先鞭をつけて、その後の発展に道を開いたと考えられる。

2) 「医学実地」の著作

ヨーロッパには「医学実地 *practica medicinae*」という書物のジャンルがある。これらは多数の個別の疾患を取り上げ、それぞれの疾患ごとに診断や治療方法を説明する。医学実地書はサレルノ医学校で生み出され、最初の医学実地書はガリオポントゥスの『受難録』である。サレルノ医学校では多数の医学実地書が書かれ、早期サレルノのペトロケルス、盛期サレルノのアルキマタエウス、バルトロメウス、ヨハネス・プラテアリウス、女医のトロータ、コフォによるものが伝存している。医学実地書はその後もヨーロッパ各国の大学の医師によってしばしば著されており、その大学はヨーロッパ全体に広がっている。イタリアでは4大学、フランスでは3大学、ドイツでは10大学、オランダでは3大学、スペイン・ポルトガルでは2大学、さらにスイスとオーストリアの大学の医師による医学実地書が確認できる。ヨーロッパ全域で少なくとも24の大学の39人の医師が医学実地書を出版しており、これらの大学では医学実地の教育が行われていたと考えられる⁴⁷⁾(表4)。

サレルノ医学校で書かれた初期の医学実地書は、部位別の疾患を頭から足まで (*a capite ad calcem*) 配列し、それに加えて全身性の熱病を取り上げた。この基本形はその後も踏襲され、女性の疾患や小児の疾患を加えたり、また機能別の区分やABC順の配列のものを例外的に生じたりしながら、11世紀後半から18世紀末まで執筆され

表4 18世紀以前のヨーロッパの大学教師による医学実地書の出版(坂井 2015b のデータに基づく)

[イタリア]

- ・パドヴァ大学
 - サヴォナローラ (1385-1468) 『医学実地』(1468), 『熱病典範』(1468)
 - カビヴァッキオ (1523-1589) 『医学実地すなわち人体のすべての疾患の診断と治療の方法』(1589)
 - メルクリアーレ (1530-1606) 『医学実地』(1601)
 - サツソニア (1551-1607) 『実地著作』(1607)
- ・ボローニャ大学
 - ヴィットリ (1450-1520) 『医学実地』(1520)
 - コルテシ (1553/4-1634) 『医学実地』(1634)
- ・ナポリ大学/ギムナジウム
 - ボルヴェリノ (fl. 1586-1589) 『今日の用法による人体各疾患治療著作』(1589), 『疾患医学実地』(1589)
 - トツィ (1638-1717) 『医学実地』(1688)
- ・バヴィア大学
 - ブルセリウス (1725-1785) 『医学実地教程』(1782-1785)

[フランス]

- ・モンペリエ大学
 - ロンドレ (1507-1566) 『人体全疾患治療法』(1566)
 - フェーネ (?-1573) 『医学実地』(1573)
 - ジュベール (1529-1582) 『医学実地最初の3書』(1572)
 - リヴィエール (1589-1655) 『医学実地』(1641), 『熱病の治療法』(1645)
- ・ランス大学
 - フランボアジェル (1560-1636) 『医学典範3書』(1595), 『疾患全種類を方式的に治療するための医学法則』(1608)
- ・パリ大学
 - フォンテーヌ (?-1621) 『人体疾患治療実地』(1611)

[ドイツ]

- ・チュービンゲン大学
 - フックス (1501-1566) 『人体各部の病気の治療, 頭先から足底まで熱病を含む4書』(1539), 『人体全体とその内部と外部の障害の治癒5書』(1543)
- ・ヴィッテンベルク大学
 - ボイツァー (1525-1602) 『実地すなわち内部疾患治療方法』(1602)
 - ゼンネルト (1572-1637) 『熱病について4書』(1619), 『医学実地』(1628-1635)
 - ロルフリンク (1599-1673) 『医学の順序と方法』(1669)
- ・イエナ大学
 - メビウス (1611-1664) 『医学実地要約梗概』(1664)
- ・マールブルク大学
 - ヴァルトシュミット (1644-1689) 『理性的医学実地』(1689)
- ・ギーゼン大学
 - ヴァレンティニ (1657-1729) 『確実医学実地』(1711-15)
- ・ハレ大学
 - ユンカー (1679-1759) 『理論実地医学概観』(1718)
 - シュタール (1660-1734) 『シュタール実地』(1728)
 - ホフマン (1660-1742) 『系統的理性的医学』(1718-39)
 - アルベルティ (1682-1757) 『医学序論』(1718-21)
- ・インゴルシュタット大学
 - モラシュ (1682-1734) 『熱病と頭部疾患の医学実地学術講義』(1725)
- ・ヘルムシュテット大学
 - ハイスター (1683-1758) 『医学実地提要』(1743)
- ・ライプツィヒ大学
 - ルートヴィヒ (1709-1773) 『臨床医学教程』(1758)
- ・ロストック大学
 - フォーゲル (1750-1837) 『実地医学提要』(1781-1816)

[オランダ]

- ・ハルデルウェイク大学
 - シュミッツ (1621-1652) 『医学実地必携』(1652)
 - ゴルテル (1689-1762) 『精選医術』(1744), 『医学実地体系』(1752)
- ・ライデン大学
 - ドドネウス (1516-1585) 『医学実地』(1585)
 - シルヴィウス (1614-1672) 『医学実地新理念』(1671-72)
 - ブルーハーフェ (1668-1738) 『箴言』(1709)
 - ウーステルディク (1740-1817) 『実地医学指針』(1783)
- ・ユトレヒト大学
 - ウーステルディク・シャハト (1704-1792) 『実地医学教程』(1753)

[スペイン, ポルトガル]

- ・コインブラ大学
 - ヴェイガ (1513-1579) 『医学実地』(1579)
- ・ヴァレンシア大学
 - ロドリゲス・デ・ヒルバウ (ca. 1625-1693) 『ヴァレンシア医学実地』(1671)

[スイス]

- ・バーゼル大学
 - ブラッター (1536-1614) 『実地』(1602-1608)
 - ツヴィンガー (1658-1724) 『医学実地劇場』(1710)

[オーストリア]

- ・ウィーン大学
 - ソルバイト (1624-1691) 『医学実地』(1680)

出版され続けた⁴⁸⁾。医学実地書が11世紀後半から18世紀末まで800年間にわたり、同様の様式を保ちながら執筆・出版され続けたのは、一つには疾患の概念がこの間にあまり変化しなかったことと、もう一つには大学での医学教育において有用な教材であったことが背景にあると考えられる。11世紀から18世紀後半まで主要な医学教材であり続けた医学実地書というジャンルを、サレルノ医学校は生み出したのである。

医学実地書は、18世紀後半に終わりを迎える。18世紀には自然界の事物についての知識を網羅する博物学が発展し、18世紀後半には植物の分類と同様の手法で疾患を分類しようとする疾病分類学 nosology が登場した。頭から足までの部位別の疾患と全身性の熱病を扱う医学実地書に代わって、疾患を一定の基準に基づいて体系的に分類しようとする疾病分類学書が臨床医学書の主流になった⁴⁹⁾。しかし医学実地書においても疾病分類学書においても、体液のバランスの乱れが疾患を引き起こすという古代以来の疾病観はなお維持されていた。19世紀に入って病理解剖が活発に行われるようになり、臓器の病変によって疾患が生じると考えられるようになった。これに対応して、臨床医学書の様式は、疾病分類学型から、折衷型、器官系統型、感染症重視型へと変化していった⁵⁰⁾。現代の内科学書の様式はさらに変化を遂げている。

まとめ

サレルノ医学校は、10世紀後半から13世紀中葉にかけて医学教師の緩やかな共同体であり、一定の校舎や組織をもつ有形の学校ではなかったが、優れた医学教育により高い名声を博した。この時期のサレルノ医学校にはヨーロッパ各国から多数の学生が集まり教育を受けており、16-17世紀のパドヴァ、17-18世紀のライデンに匹敵する。サレルノの名を冠する『サレルノ養生訓』や『サレルノ問題集』といった著作物も編まれた。サレルノ医学校では医学の理論的教材として『アルティセラ』が編まれたが、その後にアヴィケンナの『医学典範』のラテン語訳、および生理学、病

理学、徴候学、健康学、治療学の5部からなる医学理論書が用いられるようになった。医学実地の教材としては、頭から足までの部位別の疾患と全身性の熱病を扱う医学実地書の基本型が作り上げられ、そのスタイルは18世紀末まで保持された。サレルノ医学校は理論と実地からなる医学教育のスタイルと教材を作り上げ、その後のヨーロッパの医学教育に長らく継承された。

注

- 1) ズートホフの医学史研究は中世医学のみならず広範囲にわたっている。業績目録はシゲリストが作成している (Sigerist 1924)。サレルノ医学校の研究史についてはバーデルの論文 (Baader 1978) を参照。
- 2) イタリアの医師による論考 (de Divitiis et al. 2004; Della Monica et al. 2013) には、イタリア語によるこれまでの論文が多数引用されている。
- 3) ユダヤ人のエリヌス Elinus, Rabinus, ギリシャ人のポントゥス師 Magister Pontus, サラセン人のアダラ Adala, ラテン人のサレルヌス師 Magister Salernus である。Mazza, 1723, col. 63-64。
- 4) ハンダーソンの『サレルノ医学校』(Handerson 1883) による。
- 5) ダランベールの『医科学史』(Darembert 1870, vol. 1, pp. 259-266) に述べられている。
- 6) ズートホフ 70 歳を記念する論文集のシンガーの論文 (Singer, Singer 1924) から。
- 7) デ・レンツィによる『サレルノ医学校文書史』(de Renzi 1837, pp. 91-155) に述べられている。
- 8) ルノー『医学の歴史』(Renouard 1846, vol. 1, pp. 444-447) とブーシュ『医学と医学理論の歴史』(Bouchut 1864, pp. 359-363) に述べられている。
- 9) マッツァの『サレルノ市の歴史と古代』(Mazza, 1723, col. 63) に述べられている。
- 10) デ・レンツィは『サレルノ集成』全5巻 (de Renzi 1852-59) を刊行した。
- 11) ズートホフの論文 (Sudhoff 1929)、マイヤー=シュタイネクと共著『医学の歴史』(Meyer-Steineg, Sudhoff 1928) を参照。
- 12) クリステラーの1945年の論文 (Kristeller 1945) は、サレルノ医学校の歴史資料を包括的かつ批判的に検証し、サレルノ研究の最重要の論文と見なされる。
- 13) ナポリ大学の脳神経外科医の論文 (de Divitiis et al. 2004) による。
- 14) エブネルによる仮説は1961年から1968年にかけて発表されたが、イタリア語で書かれたことから国際的に広まらず、ナットン (Nutton 1970, 1971) により批判的に評価された。

- 15) ゴットホフは論文や『医学の歴史』(Meyer-Steinig, Sudhoff 1928)の中で、早期サレルノ Frühsalerno, 盛期サレルノ Hochsalerno, 晩期サレルノ Spätsalernoの語をよく用いている。ドイツの『中世事典』のサレルノの項目(Keil 2003b)では、早期を995-1087年、盛期を1087-1175年、晩期を1175-1250年としている。境界となる年号のうち1087年はコンスタンティヌス・アフリカヌスの没年、1175年はプレスラウ・コーデックスの成立年代に相当する。しかしコンスタンティヌスの没年には異論があるので、本稿では年代の境界は大まかに設定した。
- 16) ガリオポントゥスの『受難録』は、従来はガレノスなど古代の著作の焼き直しと見なされていたが、グレイズ(Gräze 2005, 2007b)は古代の複数の著作の内容を取捨選択して、医師にとって使いやすい内容と形式のものにした創造的な著作であると評価している。
- 17) 「医学実地書」は、個別の疾患を取り上げて診断と治療法を解説する臨床医学書で、頭から足まで部位別の疾患と全身性の熱病を扱い、11世紀から18世紀末までのヨーロッパで連綿と作られ用いられた。ガリオポントゥスの『受難録』は「医学実地書」の最初のものである。坂井の論文(坂井 2015a)を参照。
- 18) アルファヌス1世の伝記と業績については、『中世事典』の該当の項(Delogu 2003)を参照。
- 19) コンスタンティヌス・アフリカヌスについてはゴットホフの論文(Sudhoff 1930)がある。生涯と業績については『医学伝記事典』と『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Gräze 2007a; Green 2005a)を参照。
- 20) バルトロメウスとマウルスについては『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Wallis 2005a, 2005c)、注釈についてはクリステラーの論文(Kristeller 1976)を参照。
- 21) ニコラウスについては『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Wallis 2005d)を参照。
- 22) 『コフォの実地』についてはクロイツによる論文(Creutz 1938)を参照。
- 23) サレルノでの動物解剖の文書については、ゴットホフの論文(Sudhoff 1927, 1928)がある。
- 24) ロゲリウスについては『中世事典』の該当の項を参照。Keil 2003a。
- 25) 「プレスラウ手稿」は2部からなり、第1部に2編、第2部に40編の文書を含んでいる。Henschel 1846, Sudhoff 1920。
- 26) ウルツの著作には、『箴言と注釈 Aphorismi cum glossuli』、『元素の混合 De commixtione elementorum』、『質の作用 De effectibus qualitatum』、『医薬の作用 De effectibus medicinarum』、『味と香りの段階 De gradibus de saporibus et odoribus』、『色について De coloribus』がある。ウルツについてはファン・デア・ルフトの論文(van der Lugt 2013)、および『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Wallis 2005e)を参照。
- 27) ヨハネス・デ・サント・パウロは『医学日課書 Breviarium medicine』、『単純医薬の作用 De simplicium medicinarum virtutibus』、『種々の医薬の有益と有害の作用 De conferentibus et nocentibus diversis medicinis』、『食用花 Flores dietarum』を著している。伝記については『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Green 2005b)を参照。
- 28) ジル・ドゥ・コルヴェイユについては『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Wallis 2005b)を参照。
- 29) ブルーノ・ダ・ロンゴブルゴについてはポルツィオナトの論文(Porzionato et al. 2012)を参照。
- 30) 『サレルノ養生訓』はラテン語で書かれたが、フランス語、ドイツ語、英語、イタリア語、オランダ語など各国語に訳されている。250を越える版が出版されているが、そのうち40は揺籃期本 incunabula である。アッカーマン編の1790年版(Ackermann 1790)が標準的な版と見なされている。『中世事典』と『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Haage 2003, Weiss-Adamson 2005)を参照。
- 31) 『サレルノ問題集』のような問題集の形式は、アリストテレスの『問題集 problemata』にまで遡り、中世の大学教育でよく用いられた。ローン著『サレルノ問題集』(Lawn 1963)、デ・レーマンスとホイェンス編『アリストテレス問題集、さまざまな時代と言語』(de Leemans, Goyens 2006, pp. 116-117)、『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Touwaide 2005b)を参照。
- 32) 『アルティセラ』については、アリザバラガの論文(Arrizabalaga 1998)、『中世の科学、技術、医学』の該当の項(O' Boyle 2005)を参照。
- 33) クリステラーの論文(Kristeller 1945)による。
- 34) 『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Shank 2005)を参照。
- 35) フリードリヒ2世は1230年の秋から冬、さらに1231年5月から9月まで、南イタリアの小都市メルフィの城砦で、法律家、聖職者、実務者を集めて会議を開き、古代の法典を参考にして、国の統治の基本となる法典「メルフィ憲章」を作成し公布した。19世紀以来「皇帝の書 Liber Augustalis」とも呼ばれる。憲章は3書に分かれ、当初は219の法令を含み、後に増補された。第1書は公法、第2章は司法手続、第3書は封建法、民法、刑法を扱う。『中世事典』の該当の項(Stürmer 2003)を参照。
- 36) サレルノ医学校の15世紀までの組織については、クリステラーの論文(Kristeller 1945)と『中世事典』の該当の項を参照(Vitolo 2003)。
- 37) 16世紀以降のサレルノ大学については、グレンドラーの『イタリアルネサンスの大学』(Grendler 2002, pp. 117-121)を参照。
- 38) ニコロ・ダ・レグギオの伝記と業績については『中世の科学、技術、医学』の該当の項(Touwaide 2005a)

を参照。

- 39) ジョヴァンニ・ダ・プロシダについては『中世事典』の該当の項 (Ippolito 2003) を参照。
- 40) シルヴァティクスについては『著名医師事典』の該当の項 (Hirsch 1884–88, vol. 5, pp. 402–403) を参照。
- 41) コトゥーニョについては『医学伝記辞典』の該当の項 (Dröscher 2007) を参照。
- 42) 北イタリアの大学の医学教育についてはシライシの著書 (Siraisi 2001, pp. 203–225) を参照。
- 43) 実地と理論の両方の著作を著した医学教授は、ドイツではチュービンゲン大学のフックス Fuchs, Leonhart (1501–1566), ヴィッテンベルク大学のゼンネルト Sennertus, Daniel (1572–1637), イェナ大学のメビウス Möbius, Gottfried (1611–1664), マールブルク大学のヴァルトシュミット Waldschmidt, Johann Jakob (1644–1689), ギーゼン大学のヴァレンティニ Valentini, Michael Bernhard (1657–1729), ハレ大学のホフマン Hoffmann, Friedrich (1660–1742) とシュタール Stahl, Georg Ernst (1660–1734) で、少なくとも6大学の7人がいる。フランスではモンペリエ大学のリヴィエール Rivière, Lazare (1589–1655), イタリアではナポリ大学のトッツィ Tozzi, Luca (1638–1717), オランダではライデン大学のプールハーフェ Boerhaave, Herman (1668–1738), スイスではバーゼル大学のツヴィンガー Zwinger, Theodor; der Jüngere (1658–1724) が理論と実地の著作を出版している。
- 44) 『アルティセラ』についてはアリザバラガの論文 (Arrizabalaga 1998), 『中世の科学, 技術, 医学』の該当の項 (O’Boyle 2005) を参照。出版状況については, 重要な図書館 (米国国立医学図書館, フランス国立図書館, 大英図書館) の図書目録および原著, 複製, デジタル画像として入手した原典をもとに著者がリストを作成した。
- 45) 『医学典範』のラテン語訳者についてはドナルドソンの論文 (Donaldson 2011), 普及についてはシライシの著書 (Siraisi 1987, pp. 43–76, pp. 77–124) を参照。出版状況については, 重要な図書館 (米国国立医学図書館, フランス国立図書館, 大英図書館) の図書目録および原著, 複製, デジタル画像として入手した原典をもとに著者がリストを作成した。
- 46) 医学理論書については本問の学位論文 (本問 2003) を参照。出版状況については, 重要な図書館 (米国国立医学図書館, フランス国立図書館, 大英図書館) の図書目録および原著, 複製, デジタル画像として入手した原典をもとに著者がリストを作成した。
- 47) 坂井の論文 (坂井 2015a, b) に基づく。
- 48) 坂井の論文 (坂井 2015a, b) に基づく。
- 49) 坂井の論文 (坂井 2010) を参照。
- 50) 坂井の論文 (坂井 2011) を参照。

文 献

- Ackermann JCG (ed): Regimen sanitatis Salerni sive scholae Slaenitanae de conservanda bona valetudine praecepta. Stendaliae: D. Ch. Franzen eiusque Socii Grosse; 1790
- Arrizabalaga, J: The Articella in the early press, c. 1476–1534. Cambridge: Cambridge Wellcome Unit for the History of Medicine; 1998
- Baader G: Die Schule von Salerno. *Medizinhistorisches Journal*. 1978; 13: 121–145
- Bouchut E: Histoire de la médecine et des doctrines médicales. Leçons faites a l’école pratique de la faculté de médecine en 1862, 1863 et 1864. Paris: Germer Baillière; 1864
- Creutz, R: Der Magister Copho und seine Stellung im Hochsalerno. *Sudhoffs Archiv*. 1938; 31: 51–60
- Daremberg Ch: Histoire des Sciences médicales. in 2 vols., Paris: J.B. Baillière et fils; 1870
- de Divitiis E, Cappabianca P, de Divitiis O: The “schola medica salernitana”: the forerunner of the modern university medical schools. *Neurosurgery*. 2004; 55(4): 722–44; discussion 744–745
- de Leemans, P; Goyens, M (ed): Aristotle’s *Problemata* in different times and tongues. Leuven: Leuven University Press; 2006.
- Della Monica M, Mauri R, Scarano F, Lonardo F, Scarano G: The Salernitan school of medicine: women, men, and children. A syndromological review of the oldest medical school in the Western world. *Am J Med Gen*. 2013; 161A: 809–816
- Delogu P: *Alfanus*. Ebf. v. Salerno seit 1058. In: *Lexikon des Mittelalters I*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag; 2003. col. 389–390
- de Renzi S: *Storia documentata della scuola medica salerno*. 2nd ed., Napoli: Gaetano Nobile; 1837
- de Renzi S: *Collectio Salernitana*. in 5 vols., Napoli: Filiiatre-Sebezio; 1852–1859
- Donaldson IML: A Venetian edition of Avicenna’s works owned by Lonicer: Part I. *J R Coll Physicians Edinb*. 2011; 41: 182–184
- Dröscher A: Cotugno, Domenico Felice Antonio. In: *Dictionary of medical biography* (Bynum WF, Bynum H eds). Westport, CT: Greenwood; 2007. pp. 375–376
- Glaze, FE: Galen refashioned: Gariopontus in the later middle ages and renaissance. In: *Textual healing — essays on medieval and early modern medicine* (Furdell, EL. ed). Leiden: Brill; 2005. pp. 53–75
- Glaze FE: Constantine the African. In: *Dictionary of medical biography* (Bynum WF, Bynum H, eds). Westport, CT: Greenwood; 2007a. pp. 365.
- Glaze FE: Gariopontus. In: *Dictionary of medical biography*

- (Bynum WF, Bynum H, eds). Westport, CT: Greenwood; 2007b. pp. 539–540.
- Green MH: Constantine the African. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge; 2005a. pp. 145–147
- Green MH: Johannes de Sancto Paulo. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge; 2005b. pp. 286–288
- Grendler PF: *The universities of the Italian Renaissance*. Baltimore: John Hopkins University Press, 2002
- Haage BD: *Regimen sanitatis Salernitanum*. In: *Lexikon des Mittelalters VII*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag; 2003. col. 574–575
- Handerson HE: *The school of Salerno. An historical sketch of mediaeval medicine*. New York: [s.n.]; 1883
- Henschel AWETH: *Die Salernitanische Handschrift*. Janus (Breslau). 1846; 1: 40–84
- Hirsch A (ed): *Biographisches Lexicon der hervorragenden Aerzte aller Zeiten und Völker*. in 6 vols., Wien und Leipzig: Urban & Schwarzenberg; 1884–88
- 本間栄男: 17世紀ネーデルラントにおける機械論的生理学の展開. 東京大学大学院総合文化系大学院博士論文; 2003
- Ippolito AM: Procida, Giovanni da. In: *Lexikon des Mittelalters VII*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag; 2003. col. 236
- Keil G: Rogerius Furgardi. In: *Lexikon des Mittelalters VII*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag; 2003a. col. 942
- Keil G: Salerno. Die medizinische Schule. II. Lehrinhalte und bedeutende Lehrer. In: *Lexikon des Mittelalters VII*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag; 2003b. col. 1298–1300
- Kristeller PO: The School of Salerno. Its development and its contribution to the history of learning. *Bull Hist Med*. 1945; 17: 138–194
- Kristeller PO: Bartholomaeus, Musandinus and Maurus of Salerno and other early commentators of the «Articella», with a tentative list of texts and manuscripts. *Italia medioevale e umanistica*. 1976; 19: 57–87
- Lawn B: *The Salernitan questions: an introduction to the history of Medieval and Renaissance problem literature*. Oxford: Clarendon Press, 1963
- Mazza, A: *Urbis salernitanae historia et antiquitates*. In: *Thesaurus antiquitatum et historiarum Italiae* (Graevius JG, ed). vol. 9, part 4, Lugduni Batavorum: Petrus Vander, 1723
- Meyer-Steineg T, Sudhoff K: *Geschichte der Medizin im Überblick mit Abbildungen*. 3rd ed., Jena: Gustav Fischer, 1928
- Nutton, V: *The medical school of Velia. La Parola del Passato*. 25: 211–225, 1970
- Nutton V: *Velia and the School of Salerno*. *Med Hist* 15: 1–11, 1971
- O'Boyle C: *Articella*. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005, pp. 53–54
- Porzionato A, Macchi V, Stecco C, Parenti A, De Caro R: *The anatomical school of Padua*. *Anat Rec (Hoboken)*. 295: 902–916, 2012
- Renouard PV: *Histoire de la médecine depuis son origine jusqu'au XIXe siècle*. in 2 vols., Paris: J.-B. Baillière, 1846
- 坂井建雄: ソヴァージュ (一七〇六～一七六七) の疾病分類学. 医譚. 2010; 91: 109–123
- 坂井建雄: 19世紀における臨床医学書の進化. 日本医史学雑誌. 2011; 57: 19–37
- 坂井建雄: 18世紀以前ヨーロッパにおける医学実地書の系譜—起源から終焉まで—. 日本医史学雑誌. 2015a; 61: 235–253
- 坂井建雄: 18世紀以前ヨーロッパにおける医学実地書とその著者. 日本医史学雑誌. 2015b; 61: 273–297
- Shank M: *Universities*. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005, pp. 495–499
- Sigerist HE: *Bibliographie der medizingeschichtlichen Arbeiten von Karl Sudhoff*. In: *Essays on the history of medicine presented to Karl Sudhoff on the occasion of his seventieth birthday November 26th 1923* (Singer C, Sigerist H, eds). London: Oxford University Press, 1924, pp. 389–418
- Singer C; Singer D: *The origin of the medical school of Salerno, the first university: An attempted reconstruction*. In: *Essays on the history of medicine presented to Karl Sudhoff on the occasion of his seventieth birthday November 26th 1923* (Singer C, Sigerist H, eds). London: Oxford University Press, 1924, pp. 121–138
- Siraisi, NG: *Avicenna in Renaissance Italy. The Canon and medical teaching in Italian universities after 1500*. Princeton: Princeton University Press, 1987
- Siraisi, NG: *Medicine and the Italian universities, 1250–1600*. Leiden: Brill; 2001
- Stürner W: *Liber Augustalis*. In: *Lexikon des Mittelalters VII*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 2003, col. 1940
- Sudhoff K: *Die Salernitaner Handschrift in Breslau*. *Sudhoff Archiv für Geschichte der Medizin*. 12:101–148, 1920
- Sudhoff, K: *Die erste Tieranatomie von Salerno und ein neuer salernitanischer Anatomietext*. *Archiv für Geschichte der Mathematik, der Naturwissenschaften und der Technik*. 10: 136–154, 1927
- Sudhoff, K: *Die vierte Salernitaner Anatomie*. *Archiv für Geschichte der Medizin*. 20: 33–50, 1928

- Sudhoff, K: Salerno, eine mittellaterliche Heil- und Lehrstelle am Tyrrhenischen Meere. *Archiv für Geschichte der Medizin*. 21: 43–62, 1929
- Sudhoff K: Konstantin der Afrikaner und die Medizinschule von Salerno. *Sudhoff Archiv für Geschichte der Medizin*. 23: 293–298, 1930
- Touwaide A: Niccolò da Reggio. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005a, p. 367–368
- Touwaide A: Salernitan questions. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005b, p. 451
- van der Lugt M: The learned physician as a charismatic healer: Urso of Salerno (flourished end of twelfth century) on incantations in medicine, magic, and religion. *Bull Hist Med*. 87: 304–346, 2013
- Vitolo G: Salerno. Die medizinische Schule. I. Historische Entwicklung. In: *Lexikon des Mittelalters VII*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 2003, col. 1297–1298
- Wallis F: Bartholomaeus of Salerno. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005a, pp. 77–78
- Wallis F: Gilles de Corbeil. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005b, pp. 198–199
- Wallis F: Maurus of Salerno. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005c, pp. 334–335
- Wallis F: Nicholas of Salerno. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005d, pp. 368–369
- Wallis F: Urso of Calabria. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005e, pp. 499–500
- Weiss-Adamson G: Regimen sanitatis. In: *Medieval science, technology, and medicine. An encyclopedia* (Glick T, Livesey SJ, Wallis F eds). New York: Routledge, 2005, pp. 438–439

The Salernitan School of Medicine: Its History and Contribution to European Medical Education

Tatsuo SAKAI

Juntendo University, Faculty of Medicine, Department of Anatomy and Life Structure

The Salernitan School of Medicine was founded in the late 10th century as a loose association of medical teachers. The period before the middle 13th century was divided into three phases. In the early phase, before the end of 11th century, “practica” books were written, utilizing extant ancient literature, Arabic medical treatises were translated into Latin, and the medical text “Articella” was compiled. In the high phase before the end of the 12th century, the “Articella” was commented upon and new pharmacopoeia and practica books were written. In the late phase before the middle of the 13th century, physicians who graduated from Salerno were active in various countries in Europe. After the middle of the 13th century the school developed organizations and rules, became a university at the end of 16th century, and was closed in 1811. The Salernitan school produced “Articella”, which pioneered in theoretical medical education, and produced “practica”, which dealt with both local diseases from head to foot and systemic fever diseases, and it continued until the end of 18th century. The two major disciplines of medical education before the end of 18th century, theoretica and practica, were derived from Salerno.

Key words: medical education, theoretica, practica, regimen sanitatis Salernitanum, Articella